

JA 尾花沢肉用牛部会は、表彰事業参加翌年に JA みちのく村山肉用牛部会と改称、部会員も 39 名から 64 名に増加し、平成 17 年現在の 1 戸当たり平均肥育牛飼養頭数は 106 頭と 100 頭水準を超えている。

同部会の肥育生産の特徴は、黒毛和種のメス肥育が中心になっていることである。その主な理由は、低価格のメス子牛を導入し、独自の肥育技術を駆使して高く販売する、すなわち「儲かる畜産経営」を目指しているためである。そのため、部会では、1 頭 1 日当たり増価額を重要な収益指標と捉え、農協指導の下、1 頭毎の導入価格、出荷額、増価額、飼料費等を個人毎に検討する経営実績検討会を開催し、経営管理能力向上に向けた活動に取り組んでいる。

肥育技術の習得、改善は、部会の下部組織である青年部を中心に取り組まれている。すなわち、毎年、技術改善目標のテーマを決め、希望者がテーマに即して、1 人 3 頭の肥育牛を導入し、独自の給与飼料設計等、飼養管理技術を改善・工夫して肥育試験に取り組み、肥育技術の改善・向上に努めている。

その結果、メス和牛の平均枝肉販売価格は、平成 11 年以降東京市場の A-4 以上の水準を確保している。また、メス和牛 1 頭 1 日当たり増価額は、平成 11 年以降 700 円以上を確保し、直近の 3 年に限ると 800 円以上、さらに過去 2 ヶ年では 900 円前後に達している。増価額から

肥育出荷牛 1 頭当たり所得を推定すると、1 日当たり増価額が 700 円の場合 15.8 万円、800 円では 22.6 万円弱、900 円で 29.5 万円となり、高い収益を実現している。

部会員が最も多く在住する尾花沢地区では、後継者が就農している農家が全体の 36 % を占め、これに経営主年齢 49 歳以下農家を加えると 18 戸で肥育牛飼養農家の半数に達している。そして、この 18 戸のうち 2/3 の 12 戸は肥育牛を 100 頭以上飼養しており、100 頭以上飼養農家 14 戸の 86 % を占めている。このように、尾花沢地区では青壮年層を担い手とする肉用牛農家が分厚く存在し、多頭飼養に取り組んでいる。

また、同地区の肉用牛農家 12 戸は、「おぼなごわ堆肥散布組合」を結成し、平成 18 年春から水田への堆肥散布作業の担い手となり、耕畜連携による資源循環型農業の確立に向けた活動に取り組むこととしている。

以上のように、本事例は部会員自らが肥育試験を実施して地道に肥育技術を蓄積しつつ、高い素牛を導入して高価格販売を目指すのではなく、また単なる販売高の水準に惑わされるのではなく、農家レベルで容易に把握可能な 1 頭 1 日増価額という収益指標を重視して儲かる肥育牛生産を追求するという取り組みや、耕畜連携により堆肥を活用して地域農業の振興に寄与しようとする姿勢は評価でき、肥育牛生産のあり方を考える際の参考となる事例である。



活動のすがた

肥育牛団地の牛舎群

(みちのく村山農協提供)

(左右の屋根の勾配を変えて段違いの屋根にすることで、屋根上部全体が換気口とな牛舎の換気がスムーズに行えるようになっている)



肥育牛舎内部

(みちのく村山農協提供)

(飼槽を平らにして通路と兼用することにより牛舎内へのトラック通行が可能で、二階部分への稲わら収納等の作業が便利な構造になっている)



肥育牛房

(写真には写っていないが、牛房後方にバーンクリナーが設置され、牛床から自然にボロが落下し、ボロ出し作業を省力化している)